

# 新・瘠我慢の説

経済学者  
渡辺利夫

## 第九回 諭吉、朝鮮への恋

福澤諭吉は李朝末期から日清戦争にいたるまで、朝鮮の政情について繁く論じた。福澤は明治十五年に『時事新報』を創刊、この新聞の論説の中で圧倒的に頻度の高いテーマが朝鮮問題であった。最終的には、福澤は朝鮮が文明化に向かうことはあり得ない、この国とともに何かことをなさんとするのは「迂闊も甚し」と断じるにいたる。

その一方、日本の明治維新に倣って朝鮮の近代化を推進せんとする若き官僚群、「開化派」に対する福澤の期待にはきわめて熱いものがあった。

三田山上の福澤邸を訪れる開化派官僚に対し

て、日本はいかにして維新を成し遂げたかを指南、朝鮮人留学生を慶應義塾に受け入れ、さらには義塾の門下生を朝鮮に派し、また密かに数十口の日本刀を井上に送って開化派への支援をつづけた。義塾出身の言論人・竹越與三郎によれば、当初の福澤の朝鮮への思いの深さは「政治的恋愛」のごときものだったという。

福澤は明治維新という大業を、幕臣でありながら翻訳方という「傍観者」としてやり過ごした。その無念を晴らさんと、文明開化の新たな実践の場を朝鮮に求めたのである。朝鮮近代化の屈折点

となる後の「甲申事変」の主役・金玉均が福澤邸を訪れ、この人物を見込んだ福澤は、彼を伊藤博文、大隈重信、渋沢栄一などに引き合わせた。

金玉均は数カ月の福澤邸での滞在を経て、下関に下り、釜山を眼前に控えたところで「壬午事変」の報に接して驚愕する。国王の実父の大院君が王朝の実権を握っていた閔妃政権を放逐した明治十五年の事件である。攘夷思想の大院君は日本公使館を焼き払い、これに反発する日本軍が臨戦態勢を整えて仁川に向かったものの、ここにはすでに袁世凱率いる大量の清軍が構えていかんともしがたかった。清軍は何と大院君を馬山を経て天津に拘送するという横暴さであった。

金玉均は盟友の朴泳孝とともに再度来日した。福澤は朝鮮を案じたばかりではない。金玉均、朴泳孝の帰国に際して義塾の門下生の二人、牛場卓蔵と井上角五郎を同行させ、二人を改革の顧問とさせるよう朝鮮政府に働きかけた。激励文「牛場卓蔵君朝鮮に行く」が、明治十六年一月の『時事新

報』に掲載された。師弟関係とはかくあるか。

「行て彼の開進の率先者と為り、その士人の俊英なる者を友としてその頑陋なる者を説き、之を激して之を怒らしめず、之を論して之を辱めず、君の平生処世の技倆と学問の実力を以て、懇々之に近づき諄々之を教ることあらば、之を開明に入る、亦難きに非ず。……君も亦朝鮮国に在て全く私心を去り、猥りに彼の政事に喙を容れず、猥りに彼の習慣を壊るを求めずして、唯一貫の目的は君の平生学び得たる洋学の旨を伝て、彼の上流の士人をして自から発明せしむるに在るのみ」

しかし、牛場が朝鮮に着いた頃、清軍の後援を得て権力を握っていたのは守旧派の閔氏一族であり、開化派の力は大きく陰っていた。牛場になすべきはなく、悄然帰国。井上は文明開化の重要性を説く『漢城旬報』を発刊、これをハンゲル版の大衆紙として頒布した。金玉均は井上を仲介者として暗号電信を作成、国境を超えて福澤との交信をつづけた。

この時期、清国は朝鮮への支配権を著しく強め、日本の関与を排除しようとしていた。清国に対する福澤の言説は、次第に鋭さを増す。私（福澤）は、好んで兵力に訴えようとするものではない。忍ぶべきは十分に忍び、慎重なるべき時期は十分に慎重である。しかし、それにも限度というものがある。

「支那人が頻りに韓廷の内治外交に干渉して、甚しきはその独立をも危うくするの勢に至るときは、吾人は日本人の本分としても支那人の干渉を干渉して之を抑制せざるべからず。即ち我兵備を要するの一点なり。然かもこの事実たるや実に焦眉の急にして、一日を猶予すべき者に非ず」

日本の国内とはいえ、明治七年一月に板垣退助らによって「民撰議院設立建白書」が提出され、明治十四年には明治二十三年を期して国会を開設するという勅諭が出され自由民権運動が大きく広がりがつあった。しかし、目下の日本の最重要課題は国会開設の成否ではない。日本は壬午事変にお

いて清軍のはるか後塵を拝し、朝鮮の支配を清国に委ねてしまったではないか。朝鮮問題の解決により日本の国権を拡張することにエネルギーを注がねばならないと福澤は語気を強めた。

「畢竟国会を開設せんとするも、その目的は内政を整理し外交を処して、結局は我日本の国権を拡張せんとするものより外ならざるべし。然るに、その最大の目的たる国権をば、今後八年のその間に萎靡せしめて、然る後に始めて国会を開くも、既に素志の齟齬したるものと云うべし」

次回の「脱亜論とは何か」で論じるつもりだが、明治十七年には開化派がクーデターを敢行して政権を奪還したものの、再度の清軍の制圧によって主謀者のほとんどが惨殺されるという事変（「甲申事変」）が勃発する。横暴をきわめる清国を制しなければ、朝鮮はもとより日本も危ういとみて、結局のところ日清戦争に入り、これに日本が勝利するのだが、そこにいたるまでの日清両国の苦心には惨憺たるものがあつた。

清国はアヘン戦争での敗北という屈辱を経て、ようやく文明開化の必要性にめざめ、西洋の知識や技術を導入する「変法自強」と称される改革運動を振興した。「定遠」「鎮遠」などの列強から購入した艦船により北洋艦隊を組み、日本を上回る実力をもつにいたった。両艦はいずれも七千三百トンの甲鉄艦であり、三十センチの主要砲門、砲塔三十五センチ、舷側に三十センチの砲門を装甲した、当時の世界でも第一級の艦船であった。日本の軍艦は最大の「扶桑」でも三千八百トン、二十四センチ砲しか装甲していなかった。

日本は明治十九年に建艦公債を発行、明治二十六年には建艦を促すべく明治天皇が宮廷費削減を公にし、応じて官僚が給料の一定率の政府返還を決め、議会も政府の建艦計画案を与野党一致で支持、ようやく清国の軍事力に追いついた。戦争には勝利するのだが、最大の戦利品たる遼東半島が講和条約締結直後のロシア、フランス、ドイツの三國干渉により清国への還付を余儀なくされた。戦

時外交を任された往時の外務卿が陸奥宗光であったが、三國干渉の報に接して瞬時に氏の口をついて出てきたのは、「要するに兵力の後援なき外交は如何なる正理に根拠するも、その究極に至りて失敗を免れざることあり」であった。

ユーラシア大陸にあって特異なイデオロギーと集権力を擁して急速に軍事力を高揚させている国が中国である。戦力において中国は日本をすでに上回り、いずれアメリカをも凌駕するのであろう。ロシアによるウクライナへの侵攻が中国による台湾への侵攻をリアルなものとしている。台湾侵攻となれば尖閣諸島もその時点で中国のものとなる。歴史家、ジャーナリストよ、日清戦争にいたる全過程の検証をすべきときではないか。

#### わたなべとしお

一九三九年、山梨県生まれ。慶應義塾大学卒業、同大学院博士課程修了。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授、拓殖大学学長・総長を歴任。八五年、「成長のアジア 停滞のアジア」で吉野作造賞受賞。八七年、「開発経済学で大平正芳記念賞受賞。九〇年、「西大命洋の時代」でアジア・太平洋賞受賞。九六年、「神経症の時代」で開高健賞受賞。